『西南アジア研究』No. 26, 1987

al-Majālis wa al-Musāyarāt にみられる ファーティマ朝カリフ＝アル・ムイッズ

菟原　卓

はじめに

ファーティマ朝は，シーア派の一分派であるイスマーイール派によって，十世紀初頭北アフリカに創建された王朝であるが，その君主（カリフ）は，シーア派でいうところのイマームすなわちイスラム世界の最高主権者であり，神の代理者として統治する神政君主とされている。このイマームに関する教義はシーア派思想の中核を為すものであるから，イスマーイール派においても，もちろん精緻なイマーム論が存在する[1]。しかし，現実の統治者として存在したイマームを歴史研究の立場から論じる場合には，教義上の観念的なあるいは抽象的なイマーム論とはまた違ったアプローチのしかたが必要であろう。そこでは実在のイマームが一体どのような存在であったのか，個別的・具体的に描かれなければならないが，そのためにはイマーム個人に関する生の情報を多く含んだ史料の存在が不可欠である。その要求を満たすものが，al-Nuʿmān b. Muḥammad, *al-Majālis wa al-Musāyarāt,* (ed.) al-Ḥabīb al-Faqī, Ibrāhīm Shabbūḥ, Muḥammad al-Yaʿlāwī (Tūnis, 1978) であるといえよう。著者は al-Qāḍī al-Nuʿmān (d. 363 A. H. / 974 A. D.) として知られるファーティマ朝初期の最も著名な法学者であり，またイスマーイール派の代表的な著述家で，数多くの重要著作を残している人物である[2]。

本書は北アフリカ時代のファーティマ朝史の第一級史料といえるが，校訂刊本の出版

---

1) cf. S. N. Makarem, The Philosophical Significance of the Imām in Ismāʿīlism, *SI*, 27 (1967), pp. 41 − 53 ; idem, *The Political Doctrine of the Ismāʿīlīs*, New York, 1977, pp. 9−18.

2) ヌウマーンとその著作については，I. K. Poonawala, *Biobibliography of Ismāʿīlī Literature*, Malibu, 1977, pp. 48−68.

が遅れていたために，従来の研究では充分な活用がなされてはいなかったものである。内容の大半は，ファーティマ朝で最も傑出したカリフであり，後にエジプトを征服した第四代カリフ＝al-Mu'izz li-Dīn Allāh（在位 A. H. 341－365 / A. D. 953－975）の折りにふれての言動を側近のヌウマーンが書き留めたものである。そもそも表題にある Majālis というのはmajlisの複数形で，この場合は教学集会の意味，また musāyara は「同行（すること）」であるから，カリフを囲んだ集会やカリフへの随行の場面でのことが主として記述されていると考えればよい。もちろん中には，当時の内政，外交に関する貴重な記録や，ムイッズ以外のカリフの記述も含まれているが，それらの割合はさほど多くない。

この史料に記されたムイッズの具体的言動によって，現実の統治者として存在したイマームの像を再構成することが可能であり，またある程度まで彼の個性や宮廷の雰囲気にまで迫ることができると思われる。以下いくつかの観点から，ファーティマ朝を代表するカリフが一体どのようなイマームであったか見てみたいと思う。訳出にあたっては，神や預言者への讃辞その他のムスリムが著述上に用いる常套句の類は省いた。〔　〕内は引用頁。

I　個人的資質および能力

ヌウマーンはムイッズの有する資質や能力を諸処に記録しているが，ある箇所でのその言を要約すれば，次の通りである。

> ムイッズはあらゆる技芸に通じ，あらゆる学問に秀でている。内奥の学識（'ilm al-bāṭin[3]）についていえば，彼は深くて渡れぬ果てしない海である。神の唯一性の教義や信仰の堅固さや異端者・背教者への論駁についていえば，彼は無比であり，権威であり，導き手であり，模範である。法学や司法についていえば，それは彼の領域であり，彼の分野であり，彼の本分であり，彼の習慣とするところである。医学，工学，天文学，哲学についていえば，各々の部門に従事する者たちはすべて彼に全く依存している。彼は毎日彼らのために，技術を創造し，驚くべき物を発明している。〔148〕

要するにムイッズがすばらしい完全な知識を有していたことが述べられている。その

3）バーティンとはイスマーイール派の用語で，コーランやイスラム法の表面的ではない内奥の真の意味を指す。

具体的な一例として，彼が万年筆のようなもの[4]を考案し，職人に作らせたというようなエピソードもある〔319－20〕。

ところでヌウマーンは，このようなムイッズの知識は，生得の知識であって，教師について学んだわけではなく，また勉学によって習得したものでもないとしている〔147－48〕。さらに生得でない知識については，神から直接授かる場合もあるとされている。ムイッズ自身の言葉を引用すると，

> マンスール（第三代カリフ，在位334－41／946－53年）は時々，哲学的な問題（masā'il al-ḥikma）について私と問答をした。そして私はわかるかぎりの返答をしていた。彼は死の前に私に問題を提起していたが，私には解答が困難で闇の中にあった。しかし彼が死ぬやいなや，私には困難であった解答が，熟考も熟慮もなしに，突然わかったのである。それで私は，それが言われている通りであることを知った。すなわち「神は先行するイマームにあるものを，その生の最後の瞬間に，後継者に移す」ということを。〔265〕

つまり，ここでは，イマームとして必要な叡知は，イマーム即位の瞬間に，神から直接授かるというわけである。ちなみに言えば，イマームは各時代に一人しか存在することはできないから，これはイマームの有する叡知も二人が共有することはないという考え方でもある。したがって次のようなこともある。ムイッズの語るところによれば，カーイム（第二代カリフ，在位322－34／934－46年）の晩年，東方のある教宣管区の教宣員[5]が死に，二人の男がその跡目を争っていた。しかしカーイムは，その問題の決着をつけずに世を去り，その後マンスールも Abū Yazīd の乱の鎮圧にかかりきりであった。やがて現地の信者たちが，教宣員の後任の決定を中央に求めてきたので，マンスールがムイッズに，二人のうちいずれが適任かと尋ねると，ムイッズは熟考した上で，一人を選んで，紙に書きつけてマンスールに提出した。マンスールも自分の書付を持ってこさせ，両方を開けてみると，二人の意見は一致していたという。ところがマンスールはムイッズを抱擁して涙を流すのであった。その時ムイッズは父の泣く意味がわからなかったが，マンスールが死んで初めてそれが告別のしるしだったと悟ったという。すなわち

4）インクがペンの内部にあり，書く時にはインクが出てきて，書かない時にはインクが内部に上がってペンは乾く。それを袖の中などに入れてもインクが漏れることがないというもの。

5）イスマーイール派の教宣は，地域ブロック毎の活動をしており，それぞれの管区（jazīra）には，その統轄責任のある教宣員がいた。

マンスールは，ムイッズにイマームとしての権能が移されたのを見て，死期が近づいているのを悟ったのである。なぜならイマームの権能は，同時に二人に授かることはなく，先任者の最期に後継者に移されるからというわけである〔265－67〕。

またヌウマーンによれば，ムイッズは超自然的能力をも兼ね備えているかの如くである。たとえば蝗害と旱魃に苦しむ地方をムイッズが視察した時の話だが，ムイッズがある土地に到着すると，いつも彼の滞在によって，雨が降り，作物をよみがえらせたという。そして彼がその地を出発すると，雨はあがり，次の場所に到着するまで空は晴れあがるのである。次の場所も前と同様に旱魃状態にあるが，彼が到着するとすぐに雲が現われ，滞在が続くかぎり，大量の雨をもたらした。彼の巡幸の間中，その状態が続き，作物と果物は成長し，被害は免れたと伝えられている〔469－70〕。

これまで紹介したところをまとめると，要するにムイッズは，単に秀れているだけではなく，超人間的・超自然的ともいえるような資質や能力を有していることが記されているわけであるが，我々としてはむろん，ヌウマーンの記述をそのまま鵜呑みにすることはできない。

ムイッズは確かに幼少より利発であったらしく〔541〕，生得的に極めて秀れていたことは事実であろう。しかし，カリスマ的とされる彼の資質や能力も実は人間的な勉学や修練によって習得されたものであることが，同じ al-Majālis wa al-Musāyarāt の記述から明らかにされるのである。まずマジュリスにおけるムイッズの言葉を引用しよう。

> マンスールは，イルム（神学的知識）やヒクマ（哲学的叡知）について何か私に教えた時には，時々私に言ったものである。「それについて私に言い返せ，それについて，またその意味について私に問え，私と議論せよ，私に反論せよ，そしてお前が理解出来ないことを私に示せ。（後略）」それで私はそのようにしていた。すると，イルムとヒクマの海から，私が考えもしなかったことが私に流れ込んでくるのである。〔133〕

つまりムイッズは，父のカリフ＝マンスールとの議論によって知識を得ているのである。逆に言えばマンスールが，信徒の長たるべき後継者の教育に真剣だったこともわかる。ファーティマ朝前半期のカリフたちが君主として粒がそろっているのも，このような独特の帝王学の所産であるのかもしれない。

またムイッズ自身の語る次のエピソードも非常に興味深い。

> （ある書物の所在を係の者が知らなかったので）私は自ら書庫へ行き，いくつかの

箱を開けた。私は立ったまま，目ぼしをつけた場所に，その書物を求めた。それは宵の口だった。私は多くの書物を引っ繰り返した。そのうちに一つの書物を手にすると，私はその内容を吟味し始めていた。その中には私が深く極めたいと望んでいることが書かれてあったのである。それからまた別な書物を手にしても同様のことになった。そのように書物から書物へと吟味しつつ私は立ち続けていた。(それに夢中になっていたので) 自分がどこにいるかを思い出すこと，また座ることから私の気はそらされていた。ついに真夜中が近づき，長く立っていたことからくる足の激しい痛みが私をようやく我に帰らせた。私は書庫を去り，朝になったが，そのことによる足のひどい痛みが私を襲っていた。〔533〕

ここでは，ムイッズが知識の獲得に我を忘れるような情念を持っていたことが語られている。また別のエピソードでは，ある日ムイッズはヌウマーンに「昨夜私は眠れず，倦怠を感じた。そこで私はある本——彼は本の名を挙げた——を取り，それを調べた」といって，それから得た情報を語って長い話をし，見事なすばらしい議論を展開したと伝えられている〔429〕。彼は眠れぬ夜もむだにしないという性格であったようである。

以上のことから，ヌウマーンの伝えるように，たとえムイッズが人並みはずれた学識を持っていたとしても，それは決して天与のものではなく，むしろ父から受けた教育や自らの刻苦勉励によって習得したものであることがわかる。先に述べた巡幸中に雨が降って作物がよみがえるという話にしても，ムイッズはあらかじめ蝗害の情報を得ていたので，予定されていた出発時期を何日か遅らせるという策をとっている。それは巡幸の後を追うように蝗害が広まるというような愚を避けるためであった。そしてその後のお誂向の降雨も，仮にそれが事実であったとしても，天候に関する経験や知識があれば，ある程度の予測は可能であり，あながち自然法則を超越した現象ともいえないのではなかろうか。

II　対国家内的姿勢

al-Majālis wa al-Musāyarāt には，ムイッズが対内的にどのような姿勢で統治に臨んでいたかが反映されている。その中でも特に君主としてユニークだと思われるのは，彼の精神的教導者としての側面と，保護者または救済者としての側面である。以下順次これらについてみてみよう。

精神的教導者というあり方は，al-Majālis wa al-Musāyarāt におけるムイッズの最も顕著な側面である。信徒の教育指導においてムイッズは，彼らにまず精神的な向上を求

める。幾つかの例を示そう。ある日のマジュリスにおいて，ムイッズはクターマ族[6]の男たちに対して，次のように訓戒している〔91－92〕。「私はお前たちに三つの事を望み，三つの事を嫌悪する。私はお前たちに誠実を望み，虚偽を嫌う。私はお前たちに高潔を望み，不実を嫌う。私はお前たちに謙遜を望み，傲慢を嫌う。」別の箇所では，ムイッズのクターマへの言葉として，「私はお前たちが人々のうちで，最も学識があり，最も敬虔であり，最も忍耐強いことを望む」とある〔222〕。また次のムイッズの言葉もなかなか興味深い。「我らは，我らの支持者がイルムとヒクマを求め，善を欲し，賞讃されるのを喜ぶ。ちょうど我らが子供についてそれを喜ぶように」〔344〕。ここではイマームは子供の向上を願う親に比されているのである。

またある日のマジュリスで，ムイッズは教えを垂れた後に言う。「まことに私は次のように欲する。お前たちが聞くことや，お前たちが憶えている疑わしいこと，また曖昧なことに関して，私に問い返すように。そうすれば，私はお前たちにそれを説明するであろう。それらを鵜呑みにしてしまったり，無条件に受け入れてしまってはならない」〔116〕。これはムイッズが父から受けた問答の勧めと同じで，イマームと問答することによって，正しい知識を獲得するよう奨励しているのである。

このようにムイッズは，信徒が徳性知性共に向上することを願ってやまないのであるが，その教導がいかにもイスマーイール派的であると感じさせられるのは，次のような時であろうか。

> 我らは，我らの支持者が，この世のすべての人々によってその卓越を認められるようなウラマー（識者）であることを欲する。さもなければ，もし，我らの敵が支持者の一人の前に現れて，我らが〔日頃〕彼（支持者）に問うようなこと，また彼の宗教や信仰のこと，また何が我らのワラーヤ（walāya：イマームへの帰依）やイマーマ（イマーム職）を必要とせしめるのかについて，彼に問い，――中略――彼がろくに答えられないとすれば，それは我々の損失ではなかろうか。また，そこに我々の宗派に対する中傷，我々の無知に対する非難，我々の主張に対する侮りへの道が見出されないであろうか。〔154－55〕

ここではムイッズは，イスマーイール派信奉者に対して，理論武装を促しているわけである。不断の革命運動の中にある指導者にふさわしい言葉といえよう。

6）Kutāma. ベルベルの一部族で，イスマーイール派に改宗。初期ファーティマ朝軍の中核として王朝の創建と発展に貢献した。

もちろん先に述べた精神的向上を願う教育指導の背景には，むしろ一般信徒の無知，知的消極性，あるいは俗事への執着という状況があるし，理論武装を促す背景には，ファーティマ朝がその支配領域においても，なおスンナ派やハワーリジュ派といった宗教的・政治的敵対勢力にとりまかれていたという状況があった。その中でムイッズは，自らの教導によって，イスマーイール派勢力拡大のための人的資源の確保をはかろうとしているのである。

イマームが信徒の保護者であり，救済者であるということも，al-Majālis wa al-Musāyarāt の諸処にみられる。たとえばムイッズは言う。

> 我らの務めは，人々に必要物をあてがうことや，彼らの状態を改善することであり，また彼らに害を為すものに気を配り，彼らの隠れ場を護り，彼らの住地から害悪をそらし，彼らに血を流させず，彼らの妻と財産を安全に保ち，彼らの侵害者の手を妨げることである。そのようにして我らは昼も夜も過ごしている。〔120〕

これほどイマームが臣民の安寧のために骨折っているにもかかわらず，彼らは自分のことにのみかかずらわって，イマームの腐心には無頓着なようである。続けてムイッズの言を引用しよう。

> まことに我らは，多くの人々が得ているほどのものすら，この世で得てはいない。実に彼らのほとんどは，我らが食し飲む以上の物を食し且飲んでいる。我らが着るように彼らも着るし，我らが乗るように彼らも乗り，我らが娶るように彼らも娶っている。それでもなお我らは，彼らの状態を改善し，彼らから難儀を取り除くために骨折っているのだが，彼らは安逸をむさぼるばかりである。彼らの中で，我らのためにそれを知り，感謝する者は少なく，むしろ彼らのほとんどはそのことに気付きもせず，恩知らずである。もしそれが，彼らのために我ら自身からすることであるならば，我らはそれを止めもしよう。しかし，それは神が我らに課し，負わせたことなのである。〔137〕

イマームとしてのムイッズの気概が感じられよう。この他にも人民の保護者・救済者としてのムイッズに関する記述を列挙することは容易である。ヌウマーンはムイッズをたとえて次のように言う〔274〕。「医者は，患者の状態から，時に患者自身も知らないことを知る。我が主は，私たちの病気とその治療について，最もよく知っておられる。」またムイッズは貧窮の民を見ても心を傷める。なぜなら彼らも彼の臣民（ra'īya）であり，神の恩寵の顕れる富者であれかしと願うからである〔559〕。ムイッズが信徒に与え

るものは，もちろん現世の福利ばかりではない。彼は祖先の Ja'far al-Ṣādiq（765年没）の言葉を引いて，「まことに汝らは，我らへの献身の故に，すべて天国に住む者である。我らは，神に代って，汝らにそれを請け合う」と言明している〔402〕。

ところでこのような保護者・救済者としてのイマームの具体的な統治上のあり方は，善政を施すことに他ならない。それはまず第一にイスマーイール派支持者に対する優遇となって顕れる。ムイッズは，ファーティマ朝に仕える者には，下賜金（ṣilāt），俸禄（arzāq），衣服，駄獣，飼料を，またその妻子には手当をふんだんに与える。それらの待遇は彼らが遠征で留守の間も変ることはない。遠征から帰還した時には，また衣服や下賜金や乗馬や駄獣が届けられる。また殉教者や物故者の遺族にも，その生前と変らぬ賜与が続けられた。さらに彼らが旅行する際には，やはり武器，駄獣，天幕等あらゆる旅の必需品が支給されるのである。その他，ファーティマ朝支持者には，分与地（qaṭā'i'）や私領地（ḍiyā'）を与えるばかりでなく，彼らを地方官にも任用するといった具合である〔531－32〕。

行政面では，不正で不評判な徴税官を更迭した事蹟が伝えられている。そして，それによってたとえ国家の徴税収入が減少しても，住民が後任者の善政に感謝すれば，ムイッズは喜んだ〔251，496〕。そうしたムイッズの仁君としての側面をヌウマーンは次のように描写している。

> 春のある日，ムイッズは郊外の庭園に行楽に出かけた。マンスーリーヤ（首都）の城門を出ると，群衆が彼を取り囲み，それぞれの要望を訴え，苦情を申し立てた。ムイッズは目的地に着くまで，彼らの一人また一人，一団また一団に，直接近づき，話しかけ，答えることをやめなかった。人々の訴願が彼をいらだたせることはなかった。彼のまわりで，むしろ我々が（ヌウマーンたちが）いらいらさせられた。ムイッズの前を行く徒卒たちは，群衆を追い払うが，彼は徒卒たちに対して，人々をそのままにしておくように命じる。それで人々の多くは，いつまでもムイッズに同行し，訴願を繰り返すのである。彼が外出する時はたいてい，これがならわしとなっていた。寛容さと心の広さに関して，彼と比べられる人を私は知らないし，聞いたこともない。〔259．要約〕

もっとも，このようなムイッズの努力とは裏腹に，徴税官や役人の多くが不正を働き，不法に人々を侵害し，カリフの定めに違背しているとの苦情は絶えなかったようである〔334－35〕。実際，行政面での民衆からの苦情の多さは，それだけ誅求もあったというふうに理解できるが，総じてファーティマ朝の北アフリカ支配は，住民の間で人気が

あったとは思われない。カリフ自らが民衆の訴願処理に意を用いたことや，官吏の規律に厳格であったことも，そういう脈絡の中で考えられる必要がある。

さて，以上のような教導者また保護者・救済者としてのムイッズの個人的日常生活は，当然の如く禁欲的であり，国事と研鑽に没頭する日々であったと伝えられている。ここでは，ヌウマーンの描写するカリフの一日を紹介しておこう。

> 朝になると居館を出て，玉座に着く。そこへ主だった臣下や従者が入ってくる。そして日中になり，昼食の時間がくるまで，座所に居続ける。彼はその間中，彼が命じ治めるところの国事，またイルムやヒクマに関する本書にあるような座談に没頭するのである。座所を立つ時が来たら，（別室に）入り，食事を済ませ，礼拝をし，昼寝をする。それから起きて午後の礼拝を行い，（午前中と）同じような執務に向かう。そのようにして夜まで続ける。夜になると（別室に）入り，貴顕がそこに列席する。夜の大半を，彼は書物を調べ，諸学問の研究をし，本の著作をして過ごす。民情視察のために外出する日以外は，これが彼の日常である。〔442〕

Ⅲ　対外的姿勢

シーア派のイマームとしてムイッズが，スンナ派に対してどのような態度で臨んだかは，当時敵対関係にあったイベリア半島の後ウマイヤ朝の使節に対する言葉に如実に示されている。後ウマイヤ朝の君主ナースィル（'Abd al-Raḥmān Ⅲ al-Nāṣir. 在位300－350／912－961）の使節は，和平と休戦を求めて，ムイッズのもとへ来た。ところがそれに対するムイッズの返答は次の通りである。即ち，ナースィルは自ら amīr al-mu'minīna（信徒の長，カリフのこと）であると主張し，ウンマ（イスラム共同体）のイマーム（最高指導者）と僭称しているが，「彼や，また他のいかなる者共でもなく，我らこそがその家系なのだ。我らに対する神の命令は，我らをさしおいて，それを偽称し僭称する者と戦うことである，と我らは信ずる」として，ムイッズは和平提案を拒絶するのである〔167－68〕。また後ウマイヤ朝の使節とムイッズとの次のやりとりは，ムイッズのウンマ観を端的に示している。使節はムイッズに，ムスリムに対して慈悲を垂れることを願って言う。「信徒の長も既に御存知でありましょう。即ち戦が起これば，両軍に死者がでますが，彼らはムスリムなのです。もし信徒の長が，彼らの命を助けること，また彼らの破滅が懸念されるところのものを断つことをお考えならば，（そのように）なされますように。」しかしムイッズは断じて言い放つ。「ムスリムたちというの

は，余の祖先のウンマのことであって，汝を遣わした者の祖先のウンマではない」〔173－74〕。すなわちムイッズは，イスマーイール派信奉者だけが真のイスラム共同体の構成員だと言っているのである。そしてファーティマ朝のめざしているものは，もちろん，イスラム世界全体を覆う，イスマーイール派による統一的ウンマであるが，それを達成するための手段が，ジハード（聖戦）とダワ（教宣活動）である。

ジハードの義務に関するムイッズの言葉もヌウマーンによって諸処に書き留められている。先に挙げた後ウマイヤ朝の和平使節に対しては，「余はムスリムに対して，最も親切で情け深く，最も好意的で慈悲深い。しかし，もし彼らの中のある者が，汝の主人の側に加わるならば，彼は誤てる者共の一団に入ってしまったのであり，余とすべてのムスリムは彼らと戦わねばならない。神がコーランにおいてお命じになったように」と言明している〔174〕。したがって，ある時ジハード派遣軍の司令官が，敵を包囲攻撃中に敵側から多額の金を受け取って，軍を撤収するという報告がムイッズに届いた時，彼は激怒した。「我らは，代償金を求めるために，我らの信徒を送り出し，我らの頭を悩ませ，我らの金を使ったのではない。また我らは取引を求めたのでもない。我らはそれによって，地上に神の正義を打ち立てることを望んだのだ」〔366〕。

このようなジハード遂行の決意は，ビザンツの和平使節に対しても示されている。ビザンツ皇帝の使節が，貢納や多数の贈り物を携えて，ムイッズを訪れた。彼らの要望は永久的な休戦協定である。それに対するムイッズの返答は，イスラム信仰もイスラム法も永久的な休戦協定を禁じているということであった。すなわち「和約は，ムスリムのイマームが信者と信仰にとって妥当とみなすところに応じた，一定の期間にのみ許される。もしそれが永久的であるならば，神の僕に課されたジハードは止み，イスラムの宣教は中断され，コーランの規定もそこなわれるのである」というわけである〔366－67〕[7]。ただし，この言葉の中にも示されているように，ムイッズは現実問題としての和約そのものをまったく拒絶しているわけではない。むしろ実際には，条件と期限を定めて，平和協定を締結しているのである〔368〕。

イスマーイール派勢力伸長のための教宣活動（da'wa）についていえば，ファーティ

7）ビザンツ使節とムイッズとの会見については，cf. S. M. Stern, An Embassy of the Byzantine Emperor to the Fatimid Caliph al-Mu'izz, *Byzantion*, 20 (1950), pp. 239－58.

マ朝宮廷はその組織の本部であり，イマームはその頂点に位している。当時教宣活動は東方イスラム世界の各地で活発に展開されていたので，東方のダーイー（da'ī. 教宣員）と本部との間に，定期・不定期の通信連絡のあったことや，遠方のダーイーからの使節が，上納金や贈り物を携えて，首都を来訪したという記述がしばしば al-Majālis wa al-Musāyarātには現れる[8]。

外地のダーイーとカリフとの通信の一例を挙げると，東方にあるダーイーからムイッズに届いた書簡には，ダーイーと彼の信者たちが，イマームへの帰依と服従の上に一致団結し，諸事順調であること，カリフからの書簡が届いたこと，またダーイーが都へ送付した信者からの上納金のこと等が記されてあった。カリフから発せられた書簡の中には，ファーティマ朝軍がシジルマーサその他の西方の町を征服し，イマーム位とカリフ位を僭称していた Ibn Wāsūl および他の賊徒を捕えたこと等が記されていた。東方の信徒たちはこの捷報に喜び，カリフの書簡は写されて，件のダーイーの教宣管区（jazīra）内のさらに僻地にいるダーイーたちに配布された，と通信は伝えてきている〔405〕[9]。

ムイッズと外地のダーイーからの使節との会見では，前者がダーイーや信徒の様子，また教宣活動の状況を尋ねるのに対して，後者が教宣の順調なこと，信徒の信仰の健全なこと，また彼らの結束の強固なこと等を報告するのが通例のようである〔370，475〕。年代は明らかではないが，使節の中には，「信徒の長を東方（征服）から妨げているものは，その決定を望まれないことだけであります。もしそれを御決意なされるならば，妨げるものは何もないでしょう」というように，ムイッズに東方進撃を強く促す者もいる。しかしこの場合，カリフの返答は，時期未だしと存外慎重であった〔475－76〕。ただし，ムイッズが東方征服を計画していたことは，疑う余地のないことであり，彼はこうした会見においても，使節が東方からの来訪の途次に見聞したことを報告させるのに余念がないように見える〔370〕。ムイッズが外地の情報収集に熱心であったことは，ビザンツの使節との会談においても明らかである。ヌウマーンによれば，「ムイッズはビザンツの使節に，彼らとタルスースの人々および Ibn Ḥamdān (Sayf al-Dawla. 在位333－356／945－967）との間における戦争や相互関係について，いかなる状態かを尋ね始

8）ファーティマ朝の教宣活動については，拙稿，シーア派の反撃，『イスラム・転変の歴史』（森本公誠編，講座イスラム２，筑摩書房 1985），pp. 60－63.

9）教宣管区には教宣の統轄責任者と，その下位のダーイーがいたことがわかる。

め，その会談は永々と続いた」とある〔368〕[10]。教宣とジハードの最高責任者としては，けだし当然な態度といえよう。

ムイッズ時代におけるファーティマ朝の教宣活動に詳しく立ち入ることは，本稿のテーマを超えることでもあり，別な機会に譲りたいが，少なくとも次のことは指摘しておくべきであろう。すなわち教宣活動は，きわめて遠隔かつ広範囲に展開されていたので，ダーイーの中には，上述のように中央本部に対して求心的な者ばかりではなく，遠心的な者も相当多かったであろうということである。それは al-Majālis wa al-Musāyarāt にも反映されており，イスマーイール派教義から逸脱し，ファーティマ朝から離反してゆくダーイーに関する記事が，そこここに散見されるのである〔105，407－408，419－420，477－481〕[11]。

むすび

以上 al-Majālis wa al-Musāyarāt から得られる情報をもとに，いくつかの観点から，カリフ＝ムイッズ像を再構成しようと試みたわけであるが，我々は当然次の点にも留意しておかねばならないだろう。それは本書におけるムイッズの言動が著者によって理想化されたものではないのかということである。

本書の著述に関してヌウマーンは，マジュリスでのことを記憶しておき，夜半の礼拝の後にそれを書き留めたとしている〔224〕。そのようにして記録されたものは，ヌウマーンがムイッズ自身に見せ，その検閲の過程で，時に訂正や修正も行われたようである〔301－302〕。必然的に，採録された内容は表向きのものばかりであり，場合によっては，ある程度の潤色も避けられないものであったかもしれない。だからといって，著作の過程で過度の理想化や誇張がなされているとも断言できない。なぜならば，本書中のムイッズの言動および事蹟は，そのほとんどが公開の場におけるものであり，しかもマジュリスに参加していた者たち自身が，編集された本書を大いに求めた〔302〕というような事情もあるからである。

そもそも，自らが理想的君主であることを周囲に印象づけようとする演技は，イマームにとっては不可欠なものではなかったろうか。だとすれば，本書に反映されたムイッ

10）cf. Stern, An Embassy, pp. 247－49.

11）cf. Stern, Ismāʿīlī Propaganda and Fatimid Rule in Sind, *IC*, 23 (1949), pp. 298－307 ; idem, Heterodox Ismāʿīlism at the Time of al-Muʿizz, *BSOAS*, 17 (1955), pp. 10－33.

ズの像は，第三者から見た，公けの場での彼の姿をむしろ忠実に伝えていると考えられないこともないのである。ムイッズは信徒を教導する立場にあり，本書は彼の一種の講義録でもある。生徒を前にした教師の姿を想起するならば，理想と建前に終始するムイッズの言動も，あながち現実離れしたものとは感じられないだろう。いずれにせよ，本書の価値は，教義上の抽象的なイマーム論ではなく，実在の人物に託された具体的なイマームの在様を示している点にあることは確かなのである。

ムイッズ治世下にファーティマ朝が，政治的・軍事的に大発展したことは，周知の事実だが，その要因のひとつに，彼がイスラム史上でも指折りの英主であったことを数えてもよいだろう。当時ファーティマ朝は，イスラム世界の宗主権をアッバース朝カリフと争う立場にあったが，そのアッバース朝カリフの権威の衰退期にあって，知的にもまた精神的にも宗教的にも実際に信徒を教導できる，理想的カリフの実在を確信できることは，ファーティマ朝イスマーイール派プロパガンダの大きな拠り所となったと思われる。

しかしながら，カリフ自身による（あるいはカリフを媒介とする）教導にも限界があることは確かである。al-Majālis wa al-Musāyarāt を見るかぎり，それはイルムやヒクマを強調した理詰の教学の域に留まっており，イマームの知識の一般信徒への下達という趣も強い。たしかに，カリフと親しく一体となったマジュリスにおいては，信徒の中に一定程度の連帯意識や精神的高揚感は生じたであろう。しかしそれは内面的な宗教体験と言うにはほど遠いと言わざるを得ない。そしてファーティマ朝イスマーイール派の将来的な挫折も，このような教学の傾向と無縁ではなかろう。というのは，北アフリカはいざ知らず，東方イスラム世界では西暦九世紀以降，イスラム信仰のあり方そのものにゆゆしき変化が生じていたからである。それは一言で表現すれば，「共同体型の古典イスラム」からスーフィズム的な「個人型のイスラム」への転換と言われている[12]。そこでは「宗教的理想の実現の場を従来のように共同体に求め，シャリーアの実現を通して理想的社会をそこに実現していく努力の中に神との交わりを求めるということが意味をもちえなくなってきたのである。それよりもむしろ，個々人が自己の内面において直接に神の存在を体験し，そのようにして信仰を確かめる方向に向っていった[13]。」イス

12）中村廣治郎，スーフィズムの確立，『イスラム・思想の営み』（中村廣治郎編，講座イスラム1，筑摩書房 1985），p. 137.

13）中村廣治郎，『イスラム』，東京大学出版会 1977，pp. 227－28.

ラムが唯一のカリフによって仲介される共同体型の信仰でもあった時代は，個人的・内面的・直接的な宗教体験を重んじる信仰の時代にとってかわられようとしていた。それは同時に，ファーティマ朝のめざすような統一的ウンマへの志向が，もはやイスラムの主流においては薄れつつあったことをも意味している[14]。九世紀後半以降のイスマーイール派の抬頭は，イスラム世界の政治的・社会的状況を利したものではあったが[15]，その勢力拡大の裏では，すでにイスラム世界の精神的潮流の主流は方向を変じつつあったといわねばなるまい。

14） cf. H. A. R. Gibb, Government and Islam under the Early 'Abbasids, *L'élaboration de l'Islam* (Colloque de Strasbourg, juin 1959), Paris, 1961, p. 126.

15） イスマーイール派活性化の機会をもたらした主な背景としては，以下の状況が考えられる。(1)アッバース朝カリフ権力の弱体化と権威の低下。(2)農村および都市における社会的・経済的な不安と不満。(3)シーア内の十二イマーム派系統の政治的消極性。拙稿，シーア派の反撃，pp. 49－50.